
俺は、君のことが... (仮)

HBえんぴつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺は、君のことが… (仮)

【Nコード】

N4532Z

【作者名】

HBえんぴつ

【あらすじ】

中学校の卒業式で片思いだった女の子に振られてしまった主人公。しかし高校で心機一転して頑張ろうと決意する。主人公はどんな高校生活を送るのだろうか？

この物語はベタな設定がたくさん出てきます。嫌いな人は読まないほうがいいです。

主人公の名前が出ない、ヒロインの容姿の描写がないのは仕様です。何かの作品に設定が似ていてもそれは気のせいです。突っ込まない

てください。

また、作者はMicrosoft Wordで執筆しているので、
変なところがあったら教えてください。

共通ルート プロローグ（前書き）

誤字脱字また変なところがあったらご報告お願いします。

共通ルート プロローグ

卒業式

「ごめんなさい……」

その言葉で俺の中学校生活は終わった。

中学最後の日 卒業式の日 俺はずっと憧れていた明智翔子あけはし しょうこに振られた。

一目惚れだった。

名古屋から埼玉に引っ越してきた俺は、入学式の日、そのヒマワリのような笑顔を見てからずっと目で追いかけるようになった。

クラス発表の日、同じクラスになったことを知って嬉しかった。彼女はあの明るい性格からあつという間にクラスの人気者になった。しかし、俺はクラスメイトに囲まれて楽しそうに笑っているのを遠くからみているだけ。

その中に入る自信は俺にはなかった。

そんなことをしているうちに月日はあつという間に過ぎ去り、ほとんど話すこともないまま進級した。

二年生になってもクラスは同じだった。俺は勇気を出して彼女のグループに近づいた。

おかげで一年の頃よりは格段に話せるようになった。だが、それまでだった。一緒に帰ることもなかった。

三年生になると彼女のほうから話しかけてくるようになった。クラスは一緒だったが一年と二年の時の友達があまりクラスにおらず、彼女に友達ができるまで（とはいっても二日ぐらいで彼女の周りではグループができていたが）もっぱら俺と話し、グループができてもそのグループに入ることができた。

二人きりで一緒に家まで帰ることもあった。家は近いので自然に一緒になった。

グループメンバーも一緒だったが遊びに行くこともあった。

そんな明るい性格の彼女のことだからモテていただろうがそんな噂は全く聞かなかった。

そして卒業式の日

俺は彼女に告白した

そして

振られた

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

「ごめんなさい。あなたとは付き合えない。」

「なん…で？」

「もう…好きな人がいるの。」

彼女から告げられた名前はいつもグループの中心にいた男子の名前だった。

「だから…ごめんなさい。」

「うん…」

そんな返事しか返せない自分が悔しかった。

「じゃあ…ね」

彼女は踵を返して去って行った。

「く…そっ、うっ…うあああ!」

俺の中学生生活は終わった。

「振られちゃったか…ドンマイ」

俺が少し落ち着いて、告白場所である体育館裏から出で来ると白鳥しらとり明日香が声を掛けてきた。

「うるせえな…」

俺が心底迷惑そうな声で答えると、

「八つ当たりはしてもねえ…俊？」

と隣の男子に問いかけた。

「まあまあ、こいつも『あいつの告白、成功するかなあ』って心配してたから」

「そんなことぶつう本人の前で言うの!？」

こいつの名前は高柳俊^{たかやなぎ しゅん}。俊と明日香は中一からの親友で何かとつるんでいた友達だ。親友ともいえるかもしれない。

この告白のことも二人には協力してもらっていた。

だから俺にはわざと明るくして俺のことを慰めてくれているのかわかる。いい奴らだ。

だから俺は言った。

「ありがとな」

「何言ってるの、私の時手伝ってくれたでしょ？」

と背中をバンつとたたいた。

明日香と俊は付き合ってもう一年になる。

俺は、明日香の告白の手伝いをさせられた。俺のおかげで明日香は俊をゲットすることができたんだと今でも思う。ああ、あの告白はよかった。感動した。俺もあんな風に告白できたら成功したかも…

いやないか、好きな人いるって言っていたし。

今頃、彼女は告白しているのだろうか。ああ、こんなに悲しい思いをするんだったら、告白なんてしなけりゃよかった。

「なあ、聞いてるか？」

「えっ？」

いろんなことを考えすぎてトリップしていた俺は俊の声で我に返った。

「お前聞いてなかったのか？」

「ああ、悪い。何の話だったっけ？」

「お前の家で卒業パーティー兼残念会をやるうって話だ。」

「何で俺の家なんだ？というか残念会ってなんだ？お前らは俺を泣かせたいのか？」

「でもさあ、いつまでも悲しんでるわけじゃないでしょ。ほらほら、心機一転して高校から頑張ろうよ。」

お前は告白に失敗したことないだろ。この喪失感、中学校三年間なんだっただよ。俺の努力は全部無駄になったじゃないか。という俺の内心のツッコミも意に反さず明日香と俊は俺の手を取ってずん俺の家の方向に引きずっていく。

「ちょっと待て、俺はパーティーなんて認めてないぞ！」

今日は、ま埼城じょう高校こうの入学式にゅうがくしきの日。

俺は気持ちのいい朝を迎えた。卒業式のことはまだふっきれていないが、俊と明日香のおかげでだいぶ楽になった。
よし、がんばろう！

「行ってきます！」

俺は家を飛び出した。

共通ルート プロローグ（後書き）

何か至らないところがあっても大目に見てください。

佐伯蘭 編 1「出会い」(前書き)

誤字脱字、変なところがあったら報告お願いします

佐伯蘭 編 1 「出会い」

佐伯蘭編

〜一年後〜

「う、ウソだろっ!」

今日は二年生になって初めての登校日 つまり始業式 なのだが、

「ね…寝坊しただとっ!?!」

昨日朝方までゲームしていたのがいけなかったのか?あと三十分前に起きていればっ!

始業式に遅刻なんてシャレにならない。俺は家を飛び出した。

両親は、転勤で海外にいる。一緒に来るか?と聞かれたが、俺は英語はもはや苦手を通り越して嫌いなんだ。行くはずはない。

というわけで築四年の一戸建ては晴れて俺のものになったわけだが、朝起こしてくれる人がいないとは…うかつだった。

「ハア、ハア、ハア」

家から学校まで徒歩約二十分。

一年の時は、親が起こしてくれて三十分前には家を出ていたが、今日は約十分前だった。

俺は腕時計をちらちら見ながら走る。

「あと八分」

ぎりぎりいけるか？と思っていたその時、

ドンッ！！

「うわぁ！」

「キヤッ！」

誰かにぶつかった。

「す、すいません！」

俺は相手の顔を見るのももどかしく、また学校に走る。

相手は転んでしまったようで、ちよつと失礼かな？と思ったが、
こっちは急いでいるんだ、しょうがない。

いつもなら、助け起こしているところだが、今日は木曜日。登校
指導の先生は、学校一怖いとされる幸長こしちやういち一先生だ。

怒られるのは避けたい。

結局チャイム三十秒前には校門にたどり着いたのだが幸先生に見つかり怒られた。

説教が終わったのは、始業式が終わった後。

始業式には間に合わなかった。あんなに走ったのにちよつと理不尽な気もしたが、気を取り直して教室に向かう。

「えーと、クラスは…四組か」

四組に入ると、まだ先生はおらず騒がしかった。

「よお、また同じクラスだな」

「ゲツ、またかよ…」

俺に声を掛けてきたのは俊だった。隣には明日香もいる。この二人は今でも付き合っている。もう三年目のハズだ。

「今年は明日香も一緒なのか…よかったなあ明日香」

俺がにやにやしながら話しかけると、

「うん…」

と顔を若干赤くして答えた。

くそっ、デレデレしやがって。

俊と俺は去年同じクラスだったが、明日香は違うクラスだった。

「えっと、席は…？」

「ああ、お前の席は、ほらあそこだ。」

俊が指さしたのは一番後ろの席。ふ…ふはははは…

「これで……できる」

「何考えてるかだいたいわかるわ」

明日香がジトツとした目で見てくる。

「無論、次の授業の予習と宿題だ。」

「「それって内職だろ！」」

きれいに声が被った。仲いいな、お前ら。

「もうそろそろ先生くるだろ。座つとこつぜ」

「そつだな…じゃあ」

俺は二人に別れを告げて一番後ろの席に座った。

ふと隣を見ると、誰も座っていない。座席表は見ていないから、誰が座るか俺は知らない。もうすぐチャイム鳴るけどだいじょうぶ

かな？

ガラガラガラ

「始めます。」

ああ…人生オワタ…

入ってきたのは俺が今朝怒られた幸長一先生だった。俺：死んだわ…

教室も絶望的な雰囲気にもまれる。

が、しかし、天使が降臨した。

「あれ、幸先生、ここ五組ではないですよ？」

教室に入ってきたみんなのアイドル、たちはなちさと立花千里先生が幸先生に言った。

「え？…あつ！…すいません」

と言って幸先生は教室から出て行った。ありがとう五組。生贄になっ

と、
というわけで立花先生がホームルームを始めたが、俺の隣はまだ空席のままだ。何やってんだろ？

ガラガラガラ

「すみません！遅れました！」

と女の子が入ってきた。

「もう遅刻はしないようにね。」

「はい、すみませんでした」

さすがは天使、優しすぎる。これが幸先生だったら張り倒されるんだろうな、男の場合。

それにしてもあの子が俺の隣の席の子か…。挨拶しておくか。

「よろしくね」

「え？…あつ！…くっ…」

俺が挨拶をしたにもかかわらず、女の子はキツッと睨んできた。

え？俺何かしたっけ？この人とは一度も話したことないはずだけど…。

俺の疑問をよそにホームルームは進んでいった。

「では先生は職員会議に行ってきます。みなさん静かにしてください」

ホームルームが終わると先生が職員会議に行ってしまったので、俺は隣の女の子に何で睨んだのか尋ねた。

「覚えてないの？…はあ、あのねえ、今朝、ぶつかっただのってあ
たしなの！そのせいで私は阿井先生にこっぴどく叱られて…まった
くどうしてくれんのよ！」

「あ…悪い…。あの時は俺も急いでたから。」

「まあ遅刻しそうになったあたしがいけないだけだね…」

「阿井先生に怒られるとは災難だったな。」

「まったくよ、そのせいで今の今まで怒られてたんだから…はあ
あああ。」

「わかったわかった。悪かったよ、ジュース一本おごってやるか
ら。」

「ほんと！ありがとう！」

なんて現金な奴だ…

「まあ俺も幸先生に怒られたんだけどな。ホントきつかった。」

「ははは、いい気味ね。あつ、自己紹介がまだだった。あたし佐
伯蘭よろしくね」

「うん、よろしく」

俺と佐伯蘭の物語はこうして始まった。

佐伯蘭 編 2 「秘密」

異変

二年生になって初めてのテスト期間がやってきた。はっきり言って超憂鬱だが仕方がない、これも将来のためだ。

俺はテストは一週間前から勉強を始める。それで今まではそこそこの成績をとっていたのだが…

「まっつったくわからん！」

何これ？なめてんの？こんなのがかんねえよ…

今まではうまくいっていた勉強法がうまくいかない。立花先生が「二週間前から勉強しましょう」と言っていたが本当だったのか…

「散歩にでも行くか…」

俺は現実逃避をすることにした。

「うう、さむっ、そして真っ暗！」

五月の終わりと言ってもまだ夜は寒い。夜中の四時となればなおさらだ。

もうそろそろ新聞配達が来る時間だなあ。

俺は近くの公園を一周回ることにした。

新聞配達のおじさんのバイクが時折行きかう。

「真夜中の散歩もいいかもな…ん？」

俺の目にある新聞配達の人が止まった。その人はバイクを使っておらず、いまどき走って配達していたのだ。

「大変だな…でも何でバイクを使わないんだ？」

その人がだんだん近づいて来る。あれ？男の人じゃない？

「おい…何でそんなことやってんだ？佐伯」

「え？」

新聞配達の方は隣の席の佐伯蘭だった。

「ちょ…え、え、ええええ！」

「おい…何でそんなに驚く…前に話しただろ、俺がここらへんに住んでるの。」

「……………」

佐伯がいきなり黙り込んだ。どうしたんだ？いや、しかし…

「いや、しかし、お前が新聞配達なんてしているとはなあ、なんでやってるんだ？」

「……………」

「おい、なんで黙ってるんだ？」

「ねえ、あんた家どこ？」

「え…あ…そこだけ。」

俺は家を指さした。

「これだけ配達したら終わりだから、家の前でちょっと待っていてくれない？」

なんだ、いきなり？まあいいけど。

「分かった、じゃあ家の前で待ってるよ。」

「家の中に入ってて、なんか悪いから。」

「いいよ、待ってる」

「いいから入って。あたしは行ってくるから。」

佐伯は走って行ってしまった。しょうがない待っててやるか。

家の前で待つこと数分。佐伯がやってきた。

「なに、あんた、家の前で待っててって言ったじゃん。」

「なんか悪いだろ、こっちが」

こんな寒い中、新聞配達なんてやってるんだ。自分だけぬくぬくと暖まるわけ行かないだろ。

「なあ寒いだろ。」

「うん…ちょっと」

「配達終わったんだよな？」

「うん…でも何で？」

「じゃあ、ちょっと入って行けよ。」

「えっ、何で？」

「いいからいいから」

俺は強引に佐伯の手を引っ張り家の中に連れ込んだ。

「いま、コーヒー入れるから待ってて。」

「うん…でも…」

「いいからいいから」

俺はコーヒーを二つ持って行った。佐伯はリビングで座っていた。

「ほら」

コーヒーを渡して向かい側に座る。

「あ、ありがとう」

「……………」

気まずい沈黙が続く。

「っていつか、なんであたしを連れ込んだの？」

先にしゃべりだしたのは佐伯のほうだった。

「うーん、なんとなく？」

「なんとなくってなによ？」

「だからなんとなくだって」

「本当の理由を言え！」

言えるはずないだろ！ホントは一人暮らしがちょっと寂しくて話し

「な、なによ」

「えー『埼城高校生徒心得細則 四 校外生活 二 アルバイトは禁止とする。』知らないはずはないよな？」

「うわ…自分でも引くぐらい嫌味たっぷり！」

「え、ええと…」

「おい、目が泳いでるぞ。大丈夫か？」

「バイトのこと黙っててやるから、今日のことは黙っててくれ。」

「むっ…わかったわよ、黙ってる。でも、その代り、バイトのことは…」

「黙ってるって言ったろ？」

「OK、取引は成立ね。」

「でも、何で新聞配達なんてやってるんだ？」

「何でバイトやってるの？」

「え？ええと、いろいろ事情があつてね。」

「ふーん」

「事情ねえ…あまり触れてほしくないみたいだから詳しくは聞かない」

けど、何かあるのかな？

「ね、ねえテストどう？」

あ、こいつ逃げやがった。ま、いいけど。俺もさっきやったし。

「う、うん？て、てすですか？だ、だいじょうぶです。がんばってます、まる。」

「……………」

佐伯がジト目で見てくる。少しわざとらしくすぎたか？まあやばいのは変わらないし。

「ま、いいわ。」

お、突っ込まれなかった。ラッキー。

「あつ、そろそろ帰らなくちゃ。」

「あ、そう？」

そろそろ五時になるところだな。俺と佐伯は玄関に向かう。

「じゃあ、学校で。」

「ああ、じゃあな。また来いよ。」

なかなか楽しかった、話し相手ができて。夜は特に寂しいからな。

「ははは、もうこないよ」

ああ、振られたか…結構勇氣出して言ったんだけどな。

「ははは、ウソウソ、そんな顔しないでよ」

「え？」

「あなた、捨てられた子犬みたいな顔してるよ。くくくっ」

佐伯が笑いながら言った。そんな顔してるのか俺？

「話し相手が欲しかったんでしょ？もしかして一人暮らしが寂しかったとか！」

「いや…」

お、おいおい、な、何でわかるんだ？俺の背中に冷や汗が垂れる。

「えっ、ねえ、もしかして……凶星？……くっはははははははは」

「そんなに笑うなって」

「い……くくく……や、まさか……ふふふ……ホントだったとは、カマ掛けたら合ってたとか……ホント傑作……ははは……」

「……………」

カマ掛けられた、だっ！

「……ばらす」

「あーごめんごめん、もう笑わないから、許して。」

むかつく…チョーむかつく。ああ、あんなこと言わなきゃよかった。

「さっさと出でけ。」

と俺は佐伯をぐいぐい押しだして、ドアを閉めた。

「じゃあ、また三時間後！」

うわっ、三時間後にまた会つのかよ。ヤダヤダ。

「おっはー」

げ、やっぱり居やがる。

「今朝はありがとね。」

「お、おう」

「じゃあ、秘密を共有した記念として…」

記念として？なんだ？ゴクリ…

「ノート見せて」

「は？」

「だから、ノート見せて」

「なぜに？」

「だってさあ、あたしっていつも寝てるじゃない？だからノート取ってないんだよねえ。故に、見せて？」

「えー…やだ」

だって俺、字汚い…とはいかなくても女子に比べたら男子の字なんて、ねえ。そしたら、字きれいに書かなくちゃいけないじゃん、それもめんどくさいし。

「何でえ？……じゃあ言っちゃおっかなあ……」

え…

「みんなあ、こいつはねえ、ムグツ」

こいつ、バラそうとしやがった。俺は佐伯の口を押えながら「ごめん、なんでもない」とクラスの奴らに釈明する。

「分かった、見せるからみんなに言うな」

「ふふん、取引成立ね」

取引じゃなくて、立派な脅迫だろ、これ。

一週間後、ついにやってきたテスト当日の日。

俺はげっそりやつれた顔で登校した。テスト自体は何とか勉強した。徹夜で。しかし、体調が連日の徹夜続きですこぶるやばい。こ
んなんでテスト大丈夫か、おれ？

さらに、一週間後、テスト最終日の最後の時間、最後の問題を解き
終わると同時にチャイムが鳴った。

よっしゃあ、おわったあああ…二つの意味で…

まあいいさ、赤はないと思うし。

「どうだった、徹夜の勉強の成果は？」

「うるせえな」

話しかけてきたのは佐伯。にやにやしなから聞いてくる。

「大体お前、いつも授業寝てるじゃないか。よくそんなにユウ
だな」

「あんだとは、頭の出来が違うからねエ」

カッチーンときた。

「じゃあ、世界史勝負しようぜ。」

「おう、いいだろう。その勝負受けて立つー！」

「負けたら、一回食堂おごるで。」

「分かった。忘れないでよね」

と、そこに、

「お、面白そうなことやってるじゃんか。俺も入れるよ」

「わたしもー」

俊と明日香が入ってきた。

「よし、いいだろう。この勝負ぶりだった奴が三人のおごるって
ことだ。」

俺が提案すると、

「『賛成』」

と、三人とも乗ってきた。

ふふふ…見てろよ、今回世界史が一番できた教科なんだ。後で吼えズラかいても知らないからな！

負けた

うん、潔く負けを認めよう。それは仕方がない。

でも、

俺：七八点 明日香：八〇点 俊：八四点

佐伯：九八点

なぜに、佐伯が一番なのかその理由が知りたい。しかも九八点だと？今まで高校でそんな点数俺は取ったことないぞ！

何で、授業中寝てばっかいる奴が俺より上なんだ！なんか泣けてきた…うっ…

「あ、泣きやがったこいつ」

五月蠅いぞ俊。

ああ、俺の金が飛んでゆく……。

結局、二〇〇〇円弱もおごる羽目になった。

六月も始まったばかりだというのに若干金欠気味である。

佐伯蘭 編 3 「勉強会、そして…」 (前書き)

誤字脱字の報告お願いします。

それと野村くんごめんね？

勝手に名前使っちゃってw

佐伯蘭 編 3 「勉強会、そして…」

勉強会、そして…

六月下旬、またもや試験の季節がやってきた。もうやだ…。

「あんた、今回は試験大丈夫なんでしょうね」

なんだあ、その余裕の笑みは、佐伯？むかつく、むかつくが…

「無理だ。」

俺は、正直者だからな。

「し、正直ね…」

「俺は、ウソはつかないからな！」

「はいはい。…で、どこがわからないの？」

ん？今、佐伯の口から出たとは思えないセリフを俺の耳がとらえたのだが、空耳か…。

「あんた…教えてやらないよ？」

「えーと、数二の二二二と二二二、あと化学の二二二。」

「か、変わり身早いわね…」

「え…教えてくれないの？」

「教えるけど…」

そりゃあよかった。でも、何で突然そんな気になったんだらう？…
まっいいか、せっかく教えてくれる気になったんだし、その好意に
甘えるでしょう。

「あんた、今回も徹夜する気？」

「モチ。」

「そ、そんな自信満々で言われても…。うん、じゃあできるか…」

「？」

どうしたんだこいつ、いきなり考え込んで？

「あ、あたしがあんたの家に行って教えてあげるよ」

「……………」

は？何言っただこいつ？今まだこんなこと言わなかったのに…。

「じゃあ、明日の朝四時にあんたの家に行くから」

佐伯はそれだけ言うと教室を出て行ってしまった。

朝四時って…夜中じゃねえか！

ピンポン

本当に来たのか…

「はいはい」

俺は玄関にドアを開けに行った。奴は開口一番

「教えに来てやったわよ！」

うざっ！なんつー上から目線なんだ、まったく…

「はいはい、ありがとうー」

「あんた、それが教えてもらう人の態度？」

俺は、床に頭をこすり付けて、

「ありがとうございます！佐伯蘭様、私などの下賤の身に、勉学を教えてくださるなど身に余る光栄でございます。」

「わ、わかったから早く入れて。時間がもつたいないでしょ」

俺と佐伯はリビングに向かい合って座った。

「で、どこがわかんないんだっけ？」

「あ、うん……ここここかな、数Bは。」

「ああ、ここはねえ……………」

……………

「あつ、なるほど、ここはこうだったのね」

悔しいことに、佐伯はかなり教えるのがうまかった。俺の疑問を、丁寧に解説してくれる。学校の先生になったらいいんじゃないだろうか。

「なあ、ありがたいんだけどさ、時間いいわけ？もう六時だけど

……」

「え？ああ、いいのいいのあんたの家から直で学校行くから。」

「……………」

一瞬思考が停止した。何言ってるの、こいつ？

「め……飯は？」

「そのくらいの出費はしなさい」

なるほど、うちで食つと…

「あんたの家のほうが学校に近いのよ。ただそれだけ。」

言外に変な妄想するなと言ってくる。

まさか…俺のこと…す…き…とか……。いや無いか、照れてる様子もないし、考えすぎ…か？もうこのことは考え無いようにしよう。うんそれがいい。

「じゅあ、朝飯は俺が作るよ。」

「え？…あんた自炊できたの？」

「失礼な、それくらいできるわ。朝と夜は自分で作って食べるって決めてるの。」

「昼は？」

「メンドイから、学食」

「そうかい…でもあんた自炊できるんだねえ。超意外！」

「できなさそうで悪かったな。」

まあ、それも一人暮らしを始めて一週間でコンビニ弁当に飽きたからなんだけどな。それは言わんでいいだろ。

「じゃあ、朝ご飯は頼むよ。」

「ああ、任せとけ。」

「それまでにここだけやっっちゃおう。」

「OK」

朝食はスクランブルエッグと簡単な炒め物にご飯とみそ汁にした。

「疑ってごめんね？」

「存分に謝ってくれ」

「だってあなたに自炊なんて合わなすぎ」

「うるせえな。さ、早く食べちゃおうぜ、学校に遅れる…とそういえばお前制服は？」

「だいじょーぶ、バックの中に全部入ってるから。…お、これおいしいー！」

「お粗末さまで」

「ご飯をおいしそうに食べている佐伯の顔は、悔しいことにとっても悔しいことに…可愛かった。」

「おう、お前と佐伯が一緒に登校なんて珍しいな。」

教室に入ると、俊が声を掛けてきた。

「道の途中であっただけよ。あんたたちは毎日二人で登校してるじゃん」

言うなっということか…俺も言う気はないけど。

佐伯はそれからテストが終わるまでの間、平日は毎日俺に勉強を教えに来た。そして最終日。

「さ、これで終わり！ハァー疲れたあー」

「ありがとな、教えてくれて」

「いやいや、これで借りは返したよ。」

「借り？」

「毎日ノート取ってもらってるでしょ？これはそのお礼。あたしって借りは作らない主義なのよねえ」

なるほど、そついうことでしたか…。期待して損した。

「じゃあ、二学期の中間も教えてくれよ。ノート取るから。」

「うん、分かった。さ、ご飯食べて学校行こ」

「そうするか。」

そして、テスト最終日の最後の時間。俺は最後の問題を解き終わった。今回は、なかなかいけた。佐伯のおかげだな。七十平均は堅いぜ。

キンコンカンコン

「終わったあ、いやぁ大変だった」

「どうだった？いけたか？」

俊が聞いてきた。

「今回は、かなりいけたな。お前には負けなと思うぞ」

「おっ、言うねえ。じゃあ、ご褒美ってわけじゃないが、こんなのが手に入ったんだ一枚やろうか？」

俊が取り出したのはネズミ ランドのペアチケットだった。

「何で、そんなの持ってるんだ？」

「福引で、偶然あたってね。二枚あるから一枚は俺たちのだとしても、あと二人誘えるからな。お前にやろうと思っで。」

「おお、サンキュー心の友よ！で、いつよ？」

「明日だ。誰と行くか決めておけよ。」

と言って俊は明日香のもとに行ってしまった。明日？マジか…

「どうしようかな」

誰を誘おうか？やっぱり友達同士がいいよな。明日はみんな部活があるから…無所属で仲のいい奴は…。

と、俺は隣の奴がちらちら見てきているのに気付いた。

「佐伯、バイトがあるんじゃないのか？」

「代わってもらおう」

はあ、そうかい。速答せんでも。

「でも、いいのか、俺と一緒にだぞ？俊と明日香はムードを醸し出して近寄れないだろうし、別行動する

にしても一人で行くネズミ ランドほど悲しいもんはないぞ？」

「あなたと一緒にいい…しょうがない…」

今の“しょうがない”がなければ勘違いしそうだが、絶対こいつはそんなこと考えてない。テストで世話になったからな、連れてってやるか。

「分かった。詳しいことは後で連絡するから。」

「うん」

俺が、集合場所 入場ゲート前 に着くと、俊と明日香はもう来ていた。

「あれ、佐伯は？」

「まだだよ」

と明日香が答える。うーん、おかしいな。あいつ、時間は守るやつだと思ってたんだが。

「私、さっき連絡したの。そしたら、少し遅れるって言ってた。」
仕方ないか、何か事情があるんだろ。

「おっと、噂をすれば、だ。ほら」

俊が指さした方向を見ると、ああ、確かに、全速力で来てるな。

「ハア、ハア…ごめん、遅れた。」

「大丈夫だよ、みんな今来たところだから。ほら、早くいこ」
明日香が、佐伯の手を引っ張る。

「俺たちも行くか」

「ああ」

俺は後に声を掛けて、明日香たちの後ろをついて行った。

「うわぁー、すごいー！」

「ほら、こんなところでぐずぐずしていると、何も乗れなくなるぞ」

俺は、ツンデレラ城（なんつーひどい名前だ…）を見て感動している佐伯の背中を押す。

ていうか、こいつネズミ 来たこと無いのか？

「う、うん」

佐伯は俺の隣を歩き始めたが…

「……………」

何の会話も生まれない。き、気まずい！

こんなことになったのも俊が、『じゃあ、俺と明日香はあっち行く

から、お前らは二人でそっち行けよ。』とか言ったせいだ！

別に四人で行動してもいいんじゃないかと言いそうになったが、あの二人の間に入るのは勇気があるし、入らなくてもあの雰囲気は恥ずかしい。しょうがない、これもわかってたことだ。昨日学校で、佐伯にも説明したし。

よし、この空気を打開するためにも、何か話さねば、

「「あのっ……」」

「「……………」」

うわっ、見事に声が被った。漫画以外でもあるんだな、こういうこと。しかし、どうしたものか。いや、こういう時は俺から話さねばならんだろ。漫画だと譲り合ってまた気まずい雰囲気になったりするし。

「さ、佐伯は、ネズミ って初めてなの？」

よし、なんとか話せた。

「う、うん……何よ、悪い？」

「いや、別に……」

悪くなんかはないだろ。同じクラスの野村なんか埼玉から出たことすらないんだぜ。そいつの中学、なぜか修学旅行が秩父、という意味不明な学校らしいからな。校長が秩父出身なんだと。学校の私物化はなほだしいだろ。自分が帰省したいからって。

「……………」

ああ、また気まずい沈黙が流れてしまった。しょうがない、何か話題を振らないと。

「なあ、何に乗りたい？合わせるけど。」

すると佐伯が指したのは、

「え…ホーンテッドハウス…」

日本一怖いというお化け屋敷だった。

「……………」

「何アンタ、お化け屋敷怖いのか？」

お前はこの恐ろしさを知らないからっ。しかし、くっ、ここは男として

「ま、まさかぁー、ははは

見栄を張ってやる！

「じゃあ、行くわよ」

「お、おう」

中は真つ暗だった。当然か。いやしかし、このお化け屋敷もといホーンテッドハウスは何度来ても怖い。Wikiによると、一か月ごとに内容を変えるらしい。ごくろーさん、俺にとつてはありがたくも何でもないんだけどね。だって毎回中身が違うってことは、予想できないってことだぜ？心臓に悪すぎる。ここには三回来ているが、内容が全く違うんだもん。

一回目に来たときは、小学生の時。軽く泣いた。何でこんな遠くまで来たのに泣かなきゃならんのか。人生の理不尽を泣いたね。

二回目に来たときは、中一の時。超ビビッて、親の背中しか見てなかった気がする。

三回目は、中三。明智さん達と来た時だ。明智さんと一緒に行けるということで、テンションあがった俺は、自分から率先して、ここに入り、明智さんがいるのに変な悲鳴を上げた気がする。ちなみにこれ、俺の黒歴史？1な。これのせいで振られたんじゃないだろうな？

「さ、行きましょ」

「う、うん」

なんだこいつ、何でこんなに余裕なんだ？来たこと無いからか？このアトラクションは本当に幽霊がいるとか、出てきた人の三割が泣くっていう伝説があるっていつのに。

ああ、くそ、もう怖くなってきた。どうしようか……よし、声だけは出さないようにしよう。そうしよう。

.....

しばらく歩いたが、何とか声を上げずに済んでいる。佐伯もたまに「ヒッ」とか言っているが、悲鳴は上げていない。

ん、何かあるな……骸骨？なんつーベタな。どうせあれが動くんだろ、という俺の余裕は二秒後に完膚なきまでに叩きのめされる。

動いたは動いた。

だが、

なぜに、追いかけてくるんだああああああああ

「キヤーツー」

佐伯が一目散に逃げ出した。

ちょ、ちょっとまって…置いてかないでえええ!!

俺と佐伯は骸骨から全速力で逃げに逃げた。

.....

どれくらい逃げただろうか。もう骸骨は追いかけてこない。

「ハア、ハア…もう来ないみたいだな。さ、行こうか。」

忘れちゃいけない。まだ終わってないのだ。

「う、うん」

佐伯の声も若干震えている。このアトラクションの怖さがわかったようだな。

俺たちはまた歩き出した。時折、しかけが飛び出す。最初のころとは凝ったつくりになってきているの

か、かなり怖い。

仕掛けが飛び出すたびに、ビクッ、ビクッと震える佐伯がちょっとかわいい。

佐伯を見ていると不思議と自分は怖くなくなった。子供を見守る母

親の気持ちってこんななのかな？

ていうか、怖がりすぎだろ、自分で行きたいって言ったんだぞ。

その時

首筋に何か触れた。

うわっ、びっくりした！ 触覚にも恐怖を与えるのか。凝りすぎだろ。

隣の佐伯はまだ引っかかってないみたいだな。

と、

「ひゃあう」

という変な声を出して

なんと

信じられないことに

佐伯が

抱きついてきた

……お、おいおい、ちょっと待て、そっちのほうに驚くぞ。

そして、あるところかそのまま歩き出した！

俺が、やんわり解こうとするが離してくれない。こ、このまま行けと？

心臓がバクバク音を立てる。

く、くそ。か、考えないようにしよう。

この柔らかい感じも

なんか漂ってくる、いい匂いも

考えるな、考えちゃアカン。

.....

そんなことを考えているうちに、外の光が見えてきた。

ああ、後半の記憶が全くない。

外に出ると、佐伯はぱつと離れた。

少し残念だ……何で残念なんだ？…ああ、もう、まだ心臓がバクバク言ってるよ。どうしよう。

佐伯は、顔を真っ赤にしながら

「次行くわよ、次！」

とスタスタ行ってしまった。

しょーがない、付き合っつてやるか。

俺は、心拍数を抑えるように努力しながら、佐伯を追いかけた。

ネズミ ランドも、もうすぐ閉園という時間になった。俊と明日香と合流した俺たちは、ショップにいた。

やっぱり、土産は必須だろ。せっかく来たんだし、何にしようかなあ？キーホルダーにしておくか。

その時ふと佐伯の方を見ると、ネズミ ランドのマスコットキャラクターの三十センチぐらいのぬいぐるみの前で固まっていた。欲しいんだったら買えばいいのに。

「それが、欲しいんだったら買えばいいのに。」

俺が言うと、佐伯は首を横に振って「いらない」と言った。

目が釘付けだぞ、まったく。

「何で買わないの？」

と聞くと、佐伯は目をそらし、小さな声で、

「お金がない」

とボソツと言った。

値札を見ると、高校生の小遣いでも買えないことはない。

……そういえば、昼ごはんの時もおにぎりを食べていたな。

……思い返すと、弁当を持ってきていないときは、小さなパンか、最悪食べないこともあった。弁当も質素なものだったし。学食なんて、俺との賭けの時しか使ってるのを見たことがない。

はあ、まったく……

「本当にこれが欲しいのか？」

佐伯は無言でうなずいた。

俺は、黙ってレジに持って行った。

お土産がないのはかわいそうすぎる。おせっかいかもしれないけど…
ぬいぐるみを買って佐伯に渡す。

「一生で一回のおづりってことよ」

「でも…」

佐伯は渋ったが、

「もう買っちゃったんだから取っとけよ。」

俺は強引に押し付けた。

「…うん、ありがとう」

そこに、

「お前らも買った？じゃあ帰るぞ」

と、俊と明日香がやってきた。

「そつだな、帰ろう」

キーホルダーは買えなかったがま、いいか。楽しかったし。

埼玉高校は私立高校だ。そのせいか、期末テストが終わった後は

終業式までの一週間休みとなる。

ネズミーランドに言った次の日。三時に起きた俺は後六日（実質五日だが）の休みをどう過ごすか、だらだらしながら考えていた。有意義にだらだら過ごさねば。

もうそろそろ夕飯の支度をしようかな、と考え始めたとき、

ピンポン

と、家のチャイムが鳴った。

誰だろ？宅急便かな、頼んだ記憶はないけど…。

「はい」

と俺はインターホンもチェックせずにドアを開いた。

そこにいたのは…

「…っ！ど、どうしたんだ！佐伯！」

佐伯蘭 編 3 「勉強会、そして…」 (後書き)

感想をお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4532z/>

俺は、君のことが...（仮）

2011年12月18日02時52分発行